

聖書:ヨハネの福音書19章13～30節

説教:完了した

はじめに

ウクライナで民間人が残虐な方法で殺されているとのニュースが報じられております。もし神がいるならば、なぜ神はこのようなことを許すのか。多くの人たちが、このような怒りを抱え込みながら苦しんでいます。

そのようななかで、今日から受難週を迎えていきます。およそ二千年前、中東のイスラエルで一人の男が裁判にかけられ、死刑の宣告を受け、十字架で処刑されました。こんな話しをしても、どこか遠い昔に遠い国で起きた歴史の一コマに過ぎない。それが自分とどんな関係があるのか。そんなことよりもこの戦争をどうやって止めるべきか、そのほうがよっぽど重要だ。そう思う方もいるでしょう。しかし聖書は、この十字架は私たちに深く関係があるのだというのです。それだけではなく、今起きている戦争と決して無関係ではない。きょうはそのことを考えてまいります。

1 国家と信仰

1) 支配する者と支配される者

ここに出てくるピラトという人物、いったい何者でしょうか。当時、イスラエルはヘロデという王がいて、形の上では一つの独立した国家ということになっていましたが、実際は当時世界最大の勢力を誇っていたローマ帝国の支配下に置かれていて、総督のピラトが実際の権力を握っている。そのような複雑な状況に置かれていました。総督ピラトの権力は絶大です。イスラエルは重要なことは自分たちの手で決められない。イエスの裁判にピラトが登場するのは、そのような事情があったからでした。

2) 祭司長たちの打算

イスラエルにしてみれば、ローマ帝国の役人と軍隊が土足で家の中に入って来たようなものです。だれも歓迎しない。みな出て言って欲しいと思っている。でも生活があります。自分の生活や今の地位を守るためには彼らとうまく付き合っていくしかない。そう考える人たちも出る。その代表が祭司長たちです。15節後半。「カエサルのほかには、私たちに王はありません。」一般の人がこう言うのならまだ理解できないわけではない。しかし彼らは旧約聖書を神のことばとして教えていた宗教者た

ちです。本当なら、イエスこそ、イスラエルの本当の王さまですと真っ先に告白しなければならない。それがこともあろうに、「イエスはユダヤ人の王と自称したのだ」、つまりイエスは嘘つきだと言って、ピラトが書いた罪状書きさえも書き直しを要求したのです。

2 十字架

1) 詩篇22篇18節

その十字架の様子はどうであったのか。18節。「彼らはその場所でイエスを十字架につけた。また、イエスを真ん中にして、こちら側とあちら側に、ほかの二人の者を一緒に十字架につけた。」イエスの十字架の他に左右にも一本ずつ、計三本の十字架が立っていたことがこれでわかりますが、十字架刑がどんな処刑方法であるのか、ほとんど書かれていません。ただ、兵士たちがイエスの着物をくじを引いて分け合っていたことは書いてある。これを読んで初めて、十字架につけられる者は裸にされることを知るわけです。肉体的にそうですが、精神的にもこれ以上の屈辱を与え、プライドをずたずたに傷つけ、人間としての尊厳を徹底的に奪い取っていく処刑方法だったわけです。

イエスがこのような形で処刑されたのは、成り行きだとか偶然だったのではありません。24節にこうあります。「『彼らは私の衣服を分け合い、私の衣をくじ引きにします』とある聖書が成就するためであった。」かぎ括弧の部分は詩篇22篇18節の引用です。この詩篇はダビデの時代につくられたものと考えられていますから、十字架のおよそ二千年前にすでに預言されていたこととなります。

2) 詩篇69篇21節

それだけではありません。旧約の預言のことはもう一つ触れられています。28節。「それから、イエスはすべてのことが完了したのを知ると、聖書が成就するために、「わたしは渇く」と言われた。」そうするとそばにいた誰かがすいぶどう酒を浸した海面をイエスの口もとに差し出します。これも成り行きでこうなったのではない。詩篇69篇21節に書かれているとおりの情景なのです。このように、神があらかじめご計画したとおりに十字架刑が行われていきます。

3 完了した

1) 満足した

そしてイエスの最期はこうでした。30節。「イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。」十字架の上での最期のおことばが「完了した」であったことに目を留めます。いったい何が完了したのでしょうか。確かに神のご計画通りにすべて行われたということなのかもしれませんが、人の目にはとてもそうは思えません。イエスが公の活動を始めた頃は、国中の人々からイスラエルの王になるのではないかと期待を寄せられ、大スターにのし上がっていく。ところが祭司長、律法学者たちからの攻撃を受け、最期は大どんでん返りで、昨日までの大統領候補が、今日は死刑囚となってしまう。これでは何も完了していない。死ぬに死にきれない。普通ならそう言いたいところでしょう。それとも、惨めなままで死にたくないという思いから、心にもないことを口走ったのでしょうか。

もちろんそんなことはありません。イザヤ書53章11節にこうあります。「彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。」「彼」、あるいは「わたしの正しいしもべと」あるのは、イエス・キリストのことです。主が十字架の上で満足されながら死んでいくことは、イザヤも預言していたのです。

なぜ満足できるのでしょうか。もしかしてイエスは、死罪にあたるような犯罪を犯したために処刑されても仕方がないと諦めていたのでしょうか。実際そのような人物がいました。ルカの福音書を見ると、イエスの傍らで十字架にかけられていた一人は、自分が死罪にあたる犯罪を犯したという自覚があって、「自分のしたことの報いを受けているのだ」と言っていました。

でも、イエスはどうでしょう。ピラトできえイエスには罪を見いだせないと言っていたのです。無実の罪で死刑になる。これほど理不尽な話はありません。それなのにどうしてイエスは満足できるのでしょうか。

2) 咎を負うために

ヒントはイザヤが述べている言葉のなかにあります。「わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。」イエスはなぜ十字架におかかりになったのでしょうか。罪人である私たちの咎を負って、私たちが神の前に

正しい者とするためでした。しかし、罪とか咎と言っても、目に見えるものではありません。この方が本当に私たちの咎を負ったのかどうか、どのようにしてわかるのでしょうか。

罪がないはずの神のひとり子である方がなぜ十字架で処刑されるのか。運が悪かったからでしょうか。もしそうだというのなら、風に吹かれてどこに飛んでいくのかわからない木の葉のようなものです。それはもはや神とは言えないでしょう。でも十字架の出来事は、先ほど見たようにあらかじめ詩篇とイザヤ書のなかで預言されていました。もっとさかのぼれば、十字架は創世記3章でアダムとエバが罪を犯した時からすでに計画されていました。

神は、罪のない者を罰することは絶対にありません。罪があるから罰するのです。「完了した。」いまご自分が、十字架で罰せられている事実をご覧になり、神の子が罪人の咎を背負うという途方もないことを、完全に成し遂げたことを確認できた。それがこの意味です。

3) 人の罪

いったいどんな咎だったのでしょうか。もう少し具体的にしておきます。イエスを十字架に追いやった人たちを見ます。祭司長たちはイエスをねたみ、殺そうと計画しました。ピラトは自分の権威、名誉を失いたくないと考え、罪のない方を死刑と宣告します。兵士たちは、自分が神の子を殺す手伝いをしていることなどまったく考えもせず、十字架の下で分捕りものを分け合って騒いでいる。十字架の周りに集まった人たちはどうでしょう。最初は彼らもイエスに期待を寄せました。もしかして自分たちをローマ帝国から解放してくれるのではないか。イエスがエルサレムに入られるときは、「ホサナ、ダビデの子」と叫んで歓迎した。ところが、イエスが逮捕され裁判にかけられると、態度は一変します。祭司長たちのプロパガンダにあおられ、自分たちは嘘つきのペテン師にだまされていたのだと思い込み、それまでの期待は怒りに転じ、「除け、除け、十字架につけろ」と群衆になって叫ぶ。そうやって無実である者が、もっとも残酷な刑に処せられていく。

ひどい話だと思うでしょう。でもこれと似たような話は今でも起きているのではないか。今私たちが目にしている戦争、多くの人たちが殺される理由がないのに無差別に殺されています。そればかりではない。国家の名によって真実がかき消さ

れ、嘘が堂々と語られ、全部の人ではないにしてもある人たちはそれを鵜呑みにしていく。

今日のところと比べてください。本質は何も変わっていない。私たちは、神が戦争を止めてくれることを期待します。でもそうならないので失望してしまい、神はいないと決めつけます。違うのです。神はおられます。ただし神は、私たちの期待する方法をとらない。戦争を止めるのではなく、神みずからが人の罪の真ん中に来られて、苦しみながら死んでいきます。それが神の方法だったのです。

私たちは戦争と聞くと、まるで初めてのことのようにはありますがそうではありません。この教会に集っておられた先輩である故中本亀子姉も、故吉田顕司兄も戦争を経験されました。大宮司須磨子姉もそうです。人類の歴史は、極端なことをいえば戦争の歴史といってもいいくらいです。戦争は二度と起こしてはならないと幾度も叫んできたのに、なぜ戦争が起きるのか。私たちに罪があるからです。では、起きてしまったどうしたら戦争を止められるのか。他の誰かが止めるのでありません。私たちひとり一人がこの方の前で自分の罪を告白していく以外に道はありません。

この受難週、主の十字架を仰ぎ見ながら、自分の罪を振り返ってまいります。